

嘗てのビルマ戦線で戦った 日本将兵を想う

— その4 —

日・印の絆 (スバス・チャンドラ・ボースと旧日本陸軍の藤原機関)

高松重信・著



インド国民軍 (INA) の婦人部隊 (ラニー・オブ・ジャンシー連隊)



日緬ライブラリー・パダウ

PADAUK

前文 / 先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）

（一社）日本ミャンマー友好協会・副会長 高松重信

戦争とは人類が最も忌避すべき残虐な事変である。従って我々は最大限の努力をもって、その戦争を回避しなければならない。

しかしながら、世界の歴史に於いて戦火が絶えることはない。現状下に於いてはイスラエル・パレスティナ紛争、ロシア・ウクライナ戦争などと悲惨な戦いで多くの人命が失われている。また、中国と台湾、南シナ海、中近東などの地域では一触即発の危険性を孕んでいる。

プロイセンの将軍カール・フォン・クラウゼヴィッツは「戦争」を自身の著書「戦争論（Vom Kriege）」の中で次の様に定義付けている。

「戦争とは、敵を強制してわれわれの意志を遂行させるために用いられる暴力行為である」
即ち、双方が武器を有した暴力行為であるから、双方の将兵及び市民に人的損傷が必ず生ずることになる。

特に戦う将兵にとっては必ず自らの人命を投げ出す覚悟をしなければならない。つまり人間にとっては誠に苦しい状況下に於かれるから、一人一人の将兵にとっては極めて赤裸々な個人的な人間像を呈することになる。

我が国の国策により先の大戦中、遠い異国のビルマ戦線に派遣された日本将兵方々が過酷な戦いの中で、如何なる生き方を示していたかを我々日本人は知り、畏敬の念を払うと同時に、我々が今後進むべき人生観の道標にすべきと思う次第である。

他方、第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我が国の若人に申し伝えねばならない。

しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人が如何なる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

当一般社団法人日本ミャンマー友好協会は、1970年、ビルマ戦線から帰国された方々が設立した団体である。先の大戦中、ビルマには約30万人の日本将兵方々が派遣され、遠い彼の地で日本の両親兄弟及び人々の為に渾身の力を絞り勇戦されたが、戦い利にあらず、その内の約18万人の方々が戦病死され、未だその遺骨の多くは帰還されていない。我々は彼らに対して感謝もせず、慰霊もせず、ただ忘れるばかりの日本人であって良いのだろうかと思うことしばしばである。

この意味も含めて、日本将兵方々が、あの過酷なビルマ戦線で如何に戦われたかを我々は知り、それらの人々の遺功に報じなければならないと思う次第です。

以上の観点で、（一社）日本ミャンマー友好協会の「日緬ライブラリー・パダウ」に先の大戦中ビルマ戦線で戦った日本将兵の本義（人生観）と題して、拙文を登録させて頂いた次第である。

登録させて頂いた拙文は戦記的な興味本位でなく、悲惨な戦場で戦った日本将兵の本義（人生観）と言う角度で記述致している。読者の方々に於かれては是非とも一読して頂き、些少とも御参考に為りますれば、幸甚に存じます。



ミャンマー連邦共和国



先ず最初に以下を付記させていただきます（2025年1月21日）

私は日本国有鉄道及びJR西日本を卒業後、K社に入社し台湾の二つの鉄道有限公司の地下鉄電車を現地生産する責任者として台湾に2008年から約5年半駐在していました。そのK社の役員より若い指導者のために有益な記述を強く要請されました。そこで拙文を書き続けました。以下の本文はその内の一作として2009年10月に記述した拙文です。

2015年にはASEAN経済統合が予定されており、また、自民党の政権時代から我国はアジア共同体を提唱している。従って、このような現況から、近い将来にアジア共同体的な営みが実現すると想定される。この共同体を構築する重要欠くべからず要素の一つが交通網の整備であり、その中核がアジアの鉄道網の確立であるのは疑う余地がない。

世界の人口65億人の内、13.2億が中国（2005年）であり、11億がインドである。しかし、2025年頃にはインドが約14億となり、中国は10億を切ると言われている。間違いなく、今後インドはアジアの重要な礎石の一つになるでしょう。

最近、インドも鉄道網の整備・拡充をはかっており、日本鉄道業界も何がしかの關係を持つのではないかと想定される。現実的には日本政府機関及びJICAなどが既に現地で動いている。

インドと日本は特に第二次大戦以降、極めて親しく、且つ、友情深い両国關係であった。その原因の第一は次に起因している。

国家・民族にとって独立は何物にも代えがたい重要なものである。しかし、世界の歴史から見れば、独立が悲願であっても、多くの人々の苦しく悲しい血を流さずして勝ち得られるものではない。

インド独立の母体となったのがインド国民軍INA(1941. 12. 31)であり、このINA創立に日本軍が多大な支援を行うと同時にインド独立へ両国が共に共同した。これがインドと日本、両国が固く結びついた不変的な『友情と信頼』、結びつきとなり現在も続いている。

インドの独立に尽した主要人物が『インド独立の父（スバス・チャンドラ・ボース）と旧日本陸軍 藤原機関の人々』である。最近、我国ではそれらの絆を忘却の彼方に置いているきらいがある。

この様な背景の中で、インドと我国の固い結びつきを紹介するために今回、スバス・チャンドラ・ボースに少々焦点を当てて記述してみる。尚、それらの全体像を分かり易くするために奮戦記No10を引用したので長文になってしまっている。

I

現在に至っても、『インド・マパオ村（インパール）で 歌い継がれている旧日本軍兵士を讃える歌』

作詞作曲 マパオ村村民（インド・インパール市近郊）

一、

父祖の時代より今日の日まで、美しきマパオの村よ、いい知れぬ喜びと平和
永遠に忘れまじ。

*合唱（繰り返し）

美しきマパオの丘に、日本兵来り戦えり、
インパールの街目指して、願い果たせず、空しく去れり。

.....

四・

広島悲報、勇者の胸をつらぬき、涙して去れる、
日本の兵士よ、なべて無事なる帰国をわれ祈りてやまず。



インド・インパールの北方18kmにあるマパオ村。インパール作戦で日本軍が、この地のイギリス軍を撃退して駐留した。日本軍は村人を保護した。そして、村人から食糧や衣服の支援を受けた。村人はインド独立の為に戦う日本軍の規律の厳格と、日本軍兵士の勇敢さを讃えて歌にした。今日に至るも歌い継がれている。

II

藤原機関のシンガポール攻略と インドの独立義勇軍の創設

第二次大戦中、『友情とアジアの独立を旗印』として当時のマレー（現マレーシア）を疾駆した英雄達がいる。その名は『藤原機関＝F機関』である。このF機関を率いたのが若き藤原岩市陸軍少佐参謀であった。

F機関には大東亜戦争の気高さが包み込まれていた。その貴き志は戦後アジアの大国インドに満開の花を咲かせた。

1941年（昭和16年）12月8日、我国の旧陸軍18師団の佗美（たくみ）支隊は当時の英領シンガポールを攻略するがために、マレー半島コタバルに上陸し、日、英の戦端が切って落とされた。ほぼ同時刻、タイ最南部シンゴラ（現ソククラ）にも陸軍部隊が上陸し、英領マレーを目指して進撃を開始した。これが大東亜戦争における対英戦争の始まりである。



当時の藤原少佐参謀、我が兵庫県の黒田庄出身

この藤原参謀が率いたF機関の頭脳と行動が、後にインド全土に独立の嵐を吹き荒らすとは、当時、誰一人予想していなかった。『F機関の人々』こそ、アジアの解放・

アジア諸民族団結、即ち『大東亜共栄圏＝現EU経済共同体と近似』の実現を實踐した彼等も、また、大東亜戦争の英雄の人々であった。

『F機関』の軌跡に今次大戦の真の崇高な目的が集約されていたが、紙面の都合で彼等の一部分の活動紹介に止める。

1941年（昭和16年）開戦直前に藤原少佐に与えられた指令は、東アジア各地にあったインド系秘密結社「IIL」との接触であった。バンコク（タイ）で「IIL」の指導者と密会を重ね、日本軍への協力を取り付けた藤原少佐は、開戦直後、秘密結社の指導者・プリタムシン翁を伴って飛行機で最前線に降り立った。

このプリタムシン翁は、戦場でインド人同士が混乱することを危惧して、腕章を巻くことを提案していた。誰にでも判る簡単な目印を提唱した。それが『F』マークであった。

Freedom（自由）、Friendship（友情）、藤原（Fujiwara）

僅か11人のメンバーで始まった『F機関の誕生』である。特に『Friendship』はこの機関の特徴を物語るものであった。このメンバーに後述する『神戸在住の国塚氏』と実在の人物『マレーの虎ハリマオ』として有名な日本人、谷豊氏もいた。

● F機関は武器を携えずマレー戦線で活動した

F機関が進めたのは、シンガポールを守備するためにマレー半島（現マレーシア）に駐留する英軍大多数のインド兵に対する日本への帰順とマレー半島に暮らすインド系住民への宣撫工作であった。つまり、白人植民地からの解放を旗印に、東亜（アジア）民族の団結を謳い、日本軍への協力を求めるものだ。

戦後、藤原岩市氏は著書でF機関の立場を以下に説明している。

「私達の仕事は、力をもって敵や住民を屈服させるのではない。また威容をもって敵や住民を威服させるものでもない。私達は徳義と誠心を唯一の武器として、敵兵に、住民に臨むのである」

その言に誤りはなく、F機関のメンバーは一貫して、一丁の拳銃も持たず、ほぼ丸腰で活動を続けたのであった。

● インド兵を感動させたF機関の行為

日本軍が占領しF機関が本部をおいたマレー半島アロースターの町は、当初、権力の空白で風紀の乱れが著しかった。不逞分子が商店や市民を襲って、財産の収奪などを始めていた。

町に入った藤原機関長は、その惨憺たる光景を見て、捕虜であるインド軍モハンシン大尉に治安維持を要請した。昨日までの敵に町の警備をまかせるとは…、当の

大尉は大変に驚いた。同時に彼等インド人兵にとって、白人に代わってやってきた日本人は信頼に値するアジアの仲間であったと述懐している。

1941年12月17日、F機関は、「IIL」メンバーやインド人将校、下士官全員を集めてささやかな昼食の機会を持った。テーブルにあがったのはインド料理だった。この昼食会は『インド人将校の間に驚くべき深刻な感動を呼んだ』という。

特にモハーンシン大尉は感激のあまり椅子から立ち上がりスピーチを始めた。

「戦勝軍の要職にある日本軍参謀が、一昨日投降したばかりの敗戦軍のインド兵捕虜、それも下士官まで加えて、同じ食卓でインド料理の会食をするなどということは、英軍の中では、なにびとも夢想だに出来ないことであった。

藤原機関長の、この敵味方、勝者敗者、民族の相違を越えた、温かい催しこそは、一昨日来われわれに示されつつある友愛の実践と共に、日本のインドに対する誠意の千万言にも優る実証である」伝説が生まれた瞬間でもあった。

● INA（＝インド国民軍）の創設

1941年（昭16）の大晦日、藤原機関長はモハーンシン大尉から重要な申し出を受ける。それはINA（＝インド国民軍）の創設を願い出るものだった。このINAに参加するインド軍将兵の決断は自身の死を覚悟する他、インドに住む親兄弟の安否も気遣ったうえでの苦渋の決断を要求されたのであった。英軍からみればINAは反逆軍になるからである。

藤原機関長は重大な問題だと思った。要求の中には「INAを日本軍と同盟関係の友軍と見なす」といった条文もある。

しかし、全てを受け入れた藤原機関長は、その足で山下奉文將軍の司令部を訪れ、認可を取り付ける。インド兵を信頼していたのはF機関だけではなく、山下將軍も同じだった。

12月31日。インド国民軍INAはマレー半島の片隅で産声を上げた。そして、そのインド人待望の国軍は、シンガポール陥落直後に公然と姿を現すことになる。1942年（昭和17年）2月15日、シンガポールは我が軍によって陥落し、夕方には英軍のパーシバル將軍が降伏文書にサインして戦闘は終結する。

● 5万人を前にした歴史的な大演説

翌々日、英軍のインド兵捕虜をF機関が代表して接収することになり、市内のフェアパークにインド兵が集められた。

その数に、日本軍が驚愕する。交戦中、英軍のインド兵は多くて1万5000人と推定していたが、実際には5万人いたのだ。公園はインド兵で埋め尽くされた。(確か日本軍総数は3万5千人位で、戦闘部隊人数は2万人強であったと思う。)



大演説の光景



公園に集合したインド兵の光景

写真に向かって左側（資料を持っている）が藤原機関長
その右隣が通訳の国塚中尉（神戸市在住）
右隣がモハーシン大尉

5万人を前に藤原機関長は堂々の大演説をおこなった！！

「親愛なるインド兵諸君！」

「シンガポールの牙城の崩壊は、英帝国とオランダの支配下にある東亜諸民族のしこくの鉄鎖を寸断し、その解放を実現する歴史的契機となるであろう」

これが国塚中尉から英訳されると満場の聴衆は熱狂状態に入り、言葉が翻訳される度に、拍手と歓声で言葉が継げなかったという。そして、こう続けた。

「そもそも民族の光輝ある自由と独立とは、その民族自らが決起して、自らの力をもって闘い取られたものでなければならない。日本軍はインド兵諸君が自ら進んで祖国の解放と独立の闘いのために忠誠を近い、INAに参加を希望するものにおいては、日本軍捕虜としての扱いを停止し、諸君の闘争の自由を認め、また全面的支援を与えんとするものである」

そう宣言すると全インド兵は総立ちになって狂喜歓呼した。40分にわたる大演説は、INAにとって歴史的契機になると同時に、インド独立運動史に残る歴史的な宣言になったという。

その後、INAは戦時下のベルリンから来日を果たしたインド独立の英雄チャンドラ・ボースが全軍を率いるリーダーとして登場し、更に規模及び領土（アンダマン？諸島）を所有するINA=インド国民軍として成長し、日本軍と歩を同一にとり、ビルマ戦線と母国インパール及びアキャブ戦線で祖国独立を旗印に掲げ、犠牲的な戦いを英軍に挑んだのである。

III

スバス・チャンドラ・ボース (Subhas Chandra Bos)



1897年にインド（当時はイギリス領インド帝国）のオリッサに生まれ、カルカッタ（現在のコルカタ）の大学を卒業、両親の希望でケンブリッジに留学したが、1921年にマハトマ・ガンディー指導の反英非協力運動に身を投じた。

1924年にカルカッタ市執行部に選出されるも、逮捕・投獄されビルマのマンダレーに流される。釈放後の1930年にはカルカッタ市長に選出されたが、イギリスの手により免職された。その後も即時独立を求めるインド国民会議諸派の左派、急進派として活躍し、1937年と1939年には国民会議派議長を務めた。

現在インドの国会議事堂の正面にはチャンドラ・ボース、右にはガンディー、左にはネールの肖像画が掲げられている。インドでは最も人気の高い政治家である。また現在もコルカタにはボースがインドを脱出する直前まで住んでいた邸宅（ネタージ・バワン＝チャンドラ・ボースのヒインズー名）があり、記念館となっている。私が会った在日インド人で彼の名を知らぬ人は誰一人いなかった。

● スバス・チャンドラ・ボースの人柄

当時の山口高商を卒業した国塚氏（旧陸軍中尉＝陸軍中野学校卒業）もF機関に入っておられた。国塚氏は高齢ではありましたが、つい最近まで神戸市に在住されていた。インド独立義勇軍の創立以前から当時通訳兼インド側の代表として日本インド両国の橋渡しに多大な貢献をされた人物です。国塚氏がスバス・チャンドラ・ボースから受けた印象は次の通りであると戦後述懐されている。

氏の記述を拝見した筆者は、スバス・チャンドラ・ボース氏の生き様が我国の明治人の気骨に近似しているのも、現在の我々にとっても非常に参考になると思うから、長文であるが、少々紹介する。

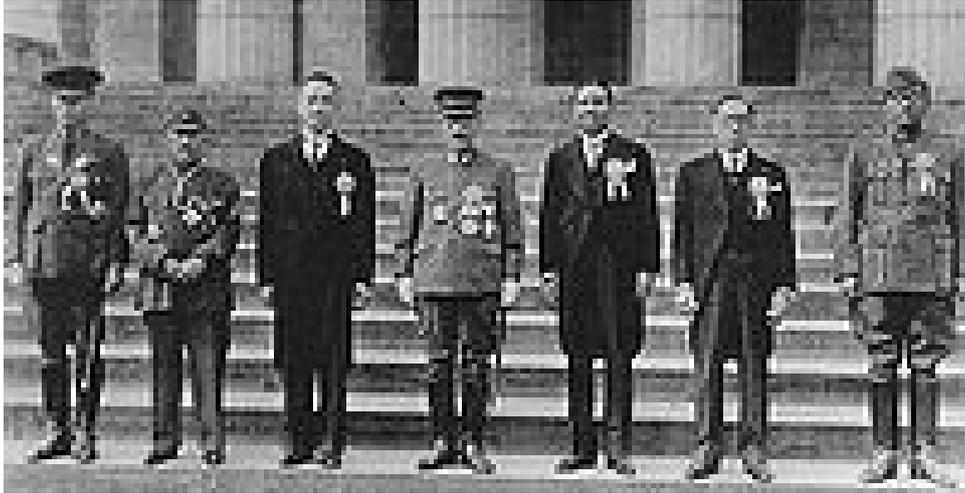
『日本の政治家を見た我々は全く想像がつかぬものがあった。身を持すること、極めて厳であり、生活もいたって質素で、一流の大政治家、公人としては最も質素であっただろう。服はカーキ色の軍服数着のみ、…食はお客をせぬ以上、印度国民軍兵食と同じ材料をとりよせ、これを食べた。…彼はいつも最高の料理をみごとなマナーで、最高の料理を食べるかのように、この粗末な兵食を平らげるのを見て、私は感心した。…この祖国愛は、彼の六尺近い雄体から滾々と湧き出す精力によってささえられて、いっさいのものを焼き尽くさずにはいられないような感情となって、ほとぼしった。

…インド国民軍訓練所の下級将校20名に近い教育のために、明日七時半に飛行機でイポーへ出発しペナンに向かう予定があっても、…ここ数日は連日睡眠三、四時間というのに、朝二時に起床し、出発するまでに、わずか二十名の教育のために行こうとする。自分の疲れもわすれて、まったく頭の下がる思いであった。…

…ボースという人は、他人に対してはきわめて寛であり、挙借温雅、会う人はみな、春風に接する思いがしたが、しかし、ひとたび、ことインドの面目に関することとなると、極めて荘重で、その毅然たる態度はみごとであった。

当時の戦勝軍たる日本軍に対しても、自分でそうと信じたことは、一步も譲らなかった。…

…国塚中尉、いいか。私は仮政府とはいえ、印度政府の元首である。しかし、彼、土肥原大將は、現地の一軍司令官にすぎない。私が先に行くと、東亜の印度人はなんと云うだろうか。ああ、やっぱりボースは、日本の傀儡だ。日本の大將に頭が上がるらない。私はこんなことで、私の政府の權威をそこねたくない。私は、印度の名誉を守らなくてはならない。『我々が、日本軍からお世話になっているということと、私が先に儀礼訪問するということは、まったく別のことなのだ。』



1943年大東亜会議の各国首脳

● 自由インド仮政府の樹立

1943年（昭18）10月21日ついに全インド人待望のうちに、自由インド仮政府が樹立された。

その樹立式がシンガポールの最大の劇場であった『大東亜劇場』で東亜各国の要人を迎えて挙行された。

インド仮政府主席として、この仮政府成立の意義と将来計画について、スバス・チャンドラ・ボースは、実は一時間半にわたる大宣誓をしたのである。カーキ色の軍服に、堂々たる体躯をつつんだボース氏の声が低く静かにマイクロフォンを通じて流れたとき、大聴衆は息を吞んで聞き入ったと言われている。その宣誓の一部を紹介する。

『予、スバス・チャンドラ・ボースは、神の名において、ここインド、三億八千万人の同胞を解放せんことを誓う。予は、予の生涯、最後の息を引き取るまで、この神聖なる独立開放の戦いを誓う。』

『予は、つねにインドのしもべとして、インド自由保全のため、予の血の最後の一滴までささげんことを誓う。』

後述している通り、彼は日本が敗戦した直後、台湾から我が軍の爆撃機でソ連に向ったところ、飛行機事故で死亡するのであるが、生前の直前まで、ボースはその宣言を全うするのである。

凡人以下の私（筆者）ではあるが、世界の政治家と些か接触したり、書物を読んで

きた。その狭義な知識の中ではあるが、彼、ボース氏の見識、資質及びインド国民を愛する気持ちなどから判断すると、彼は世界第一級の政治家であったと思う。失礼であるが、当時の東亜各国を代表する政治家の誰よりも、明らかに優れていたと断言できる。

● スバス・チャンドラ・ボース率いるインド国民軍とインパール作戦

*インパールはインド国内の一地方都市名である。

インド北東部アッサム地方に位置し、ビルマから近いインパールは、インドに駐留するイギリス軍の主要拠点であった。ビルマーインド間の要衝にあつて、連合国から中国への主要な補給路（援蒋ルート）であり、ここを攻略すれば中国軍（国民党軍）を著しく弱体化できると考えられた。

大本営陸軍部は、1943年8月、第15軍司令官牟田口廉也陸軍中将の立案したインパール攻略作戦の準備命令を下达した。しかし、作戦計画は極めて杜撰であった。

川幅約600mのチンドウィン川を渡河し、その上で標高2,000m級の山々の連なる、急峻なアラカン山系のジャングル内を徒歩で長距離進撃しなければならないが、補給が全く軽視されていることなど、作戦開始前からその実施にあたっての問題点が数多く指摘されていた。歩兵は二十日分の食料と小銃弾凡そ200発の携帯のみ。

竹田宮恒徳王が、「一五軍ノ考ハ徹底的ト云ウヨリハ寧ロ無茶苦茶ナ積極案」と評したように、当初はビルマ方面軍、南方軍、大本営などの上級司令部総てがその実施に難色を示したインパール作戦であったが、1944年1月に大本営によって最終的に認可された背景には、日に日に敗色が濃くなっていく戦局を一気に打開したいという東條英機の思惑が強く働いていた。



印度国民軍

1943（昭18）年2月4日インド国民軍6,000人もこの独立のために、チェロ、デリーへチェロ、デリーへと叫び声を上げて、山から谷へ、谷から山へと雨に打たれ進軍した。シャヌワーズ大佐の指揮するスバス連隊は、勇敢に連戦につぐ連戦を重ねながら、ついに日本軍第三十一師団とともに印度領コヒマを占領した。しかし、6月に入ると、川は氾濫し、泥水は道路を崩し一切の補給は止まってしまった。

大半がアミーバー赤痢、マラリア、脚気などを患った。ジャングルの草に僅かの陸稲をまぜ飢えを凌いだが、入れるべき塩一片もなかった。

全員飢餓状態になっても、誰一人、英軍に降伏する者はなかった。傷病兵達は、生きるすべを失い、『ジャ・ヒンド（印度万歳）』を叫んで、自らの銃で、生命を断っていった。

それでも印度国民軍は戦いを続けた。

英軍はインド国民軍に投降を呼びかけた。『親愛なる印度国民軍諸君よ。諸君は、日本軍にだまされ、糧秣も弾薬医薬品もない。…今心から降伏をおすすめする。…諸君の妻子は印度で待っている。即刻三ヶ月の月給と休暇をあげよう。…諸君を心から歓迎する…』

…この甘い言葉も国民軍の将兵をまどわすことはできなかった。彼らの耳には、あのネタージ（チャンドラ・ボース）の声が残っていた。『そうだ。英国の奴隷となって、贅沢な食事をして死ぬより、独立の戦士となって、ジャングルの土と化そう。』

日本軍第三十一師団の佐藤師団長の退却命令により、ようやく6月22日にスバス連隊はウクルル（ビルマ領）へ退却した。その後、佐藤師団長はシャヌワーズ大佐の願いを好意的に入れて、パレル方面の印度国民軍第一師団に合流する許可を与えてくれた。しかし、その行軍で力尽きて倒れる者が続出した。病人は続々と、途中で自決した。生きている者の唯一の執着は、パレルで英軍と戦うことであった。

しかし、パレル方面の戦況も我に利あらず、国民軍第一師団も、撤退に迫られていた。シャヌワーズ大佐はここに至って敵軍に突入して玉砕までを決心していたところ、ネタージから『全員、死力を尽して撤退せよ。』との特別命令を受けた。

● インド国民軍のビルマ撤退とスバス・チャンドラ・ボースの態度

印度国民軍のビルマでの戦いはインド東海岸に近いところでも、日本軍と協力して、精強な英軍西アフリカ黒人師団とも戦っている。

『パラット・マタ・キ・ジャイ（母なる印度万歳）』『ネタージ・キ・ジャイ（ボース万歳）』を叫びながら、一インチ、一インチと、白兵戦によって敵陣を攻め落

としている。』



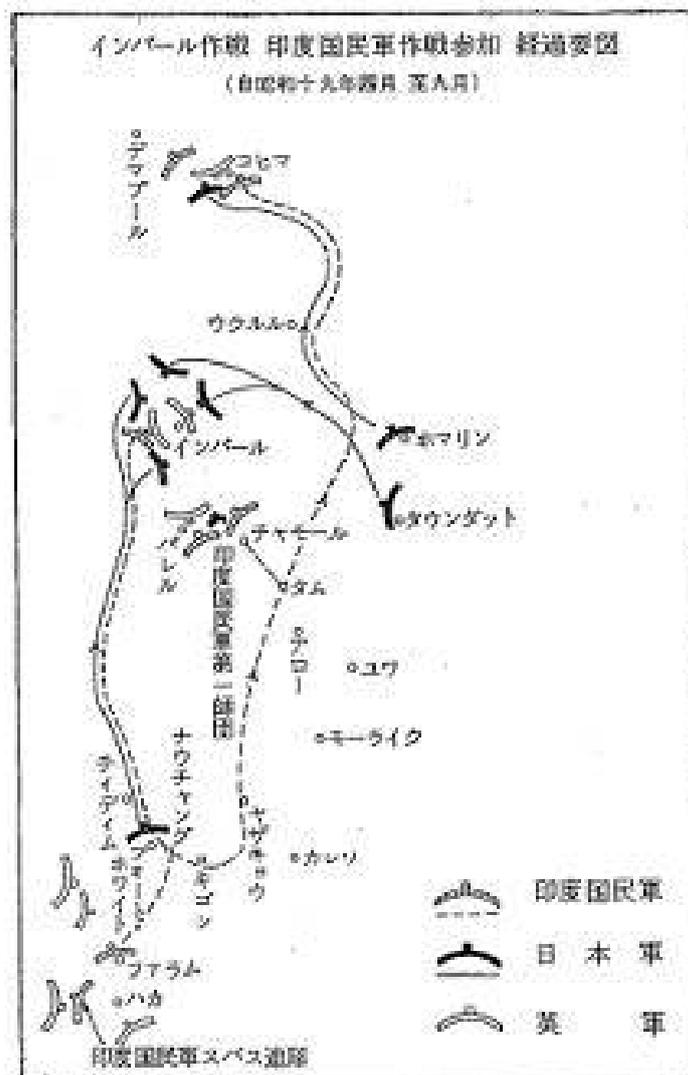
左端はチャンドラボース、女性はジャンシー連隊長

※この東海岸の戦闘には我が故郷の姫路第111連隊も彼らと連帯し戦った。連隊は約3,000名で構成されていたが、運良く姫路に帰郷したのは凡そ300名であった。この戦闘が如何に過酷であったかを物語っている。

それらインド将兵が印度独立を願って死闘したが、紙面の都合で以上の一部のみに留める。

しかし、戦い利あらず、日本軍のビルマ撤退に供して、彼らも、また、兵を退いたのである。古今、撤退をよく行なう将は名将と言われている。この撤退に関して、旧日本軍幹部の醜い行動に比して、スバス・チャンドラ・ボースの見事な対応は、印度国民から、現在に至っても尊敬を受けている原因になっていると思うから、その撤退の一断面を少々紹介する。

インパール作戦挫折後、ビルマ中部重要都市メイクテーラ（現ネーपीドー北方80km）は1945年（昭20）2月27日、敵手に落ちたので、4月20日、ビルマ方面軍はラングーン（ビルマの首都、現ヤンゴン）撤退を決意した。しかし、未だジャングルで悲惨な戦いをしている第二十八軍及びラングーンに住む日本一般人と傷病兵などをほったらかしにして、その後、方面軍軍司令官及び高級軍人みずからは、軍用機でタイ国境の安全地帯であるモールメン方面へ逃げ出してしまった。この日本軍高級軍人の愚行は世界から響きを買っている。満州の関東軍逃避も同じである。「モールメンは（映画ビルマの豎琴）の舞台となったムドンの近郊である」



方面軍司令部から撤退の連絡を受けたボース氏は、印度国民軍部隊とは、ほとんど連絡がつかず、ビルマ各地で苦戦しているというのに、私だけが撤退することは出来ぬ、と言ひそれを拒否し、あくまでもラングーンに留まり、最後まで戦つて玉砕せんことを望んだ。もし、生きて祖国の独立が達成できねば、むしろ、潔く玉砕し、もつて後世の青年を感奮せしめる方が本懐だと、側近にもらした。しかし、国民軍最先任のロガナンダ老軍医少将に身をもつて、懇々と印度独立の大目的のために、ラングーン撤退を勧められ、それがボース氏を動かした。

ボースが、このとき、特に憂慮したのは、婦人部隊ラニー・オブ・ジャンシー連隊の運命であつた。このマレー・タイ国のインド人良家の子女よりなる志願兵が、万が一、敵手に落ち、辱めでも受けるようなことがあれば、人として死んでも死にきれない責任感を感じたので、日本軍にも、この婦人部隊とともに撤退する旨を伝えた。(このインド婦人部隊を救出したのが小川中佐であつた。本ライブラリーNo. 10

で紹介する予定)

この困難を極めた撤退行の状況は誠に辛酸であった。しかし、ジャンシー連隊と国民軍に対するボーズ氏のなみなみならぬ配慮と姿勢は矢張り彼が世界第一級の人物であり、インド独立の父と尊敬される所以であると思う。

当時の困難状況を知るために、この連隊の支隊長（女性）であった若きミス・ジャヌキー・テパース中尉の日記の一部を紹介したい。

…『1945年（昭20）4月26日』…ようやくワアウについた。川には橋がない。なんとか一艘の渡し船が、我々用に与えられた…光機関長 磯田中将がネタージ（ボース氏）に、一番に渡って欲しいと頼んだが、ネタージは、『私はジャンシー連隊全部がわたるまでは、この川を渡らない』と言ってつっぱねた。…我々全員が渡ったとき、まだ、ネタージは対岸にいた。もう夜がすっかり明けている。敵機が来る時刻だ。心配になる。…ああネタージが最後の渡し船でくる。…

『4月27日』…終日の爆撃と銃撃でネタージの真隣にいたナジール・アーメッド中尉は即死した。…夜中中かかって膝が没するかのような泥道を十マイル歩いた。しかし、ジャンシー連隊（婦人部隊）の士気は高い。みな小銃を担ぎ背囊を背負っている。その中には、食料・弾薬・手榴弾が入っている。一人当たり三十五ポンド（約15.88kg）の背囊である。ネタージ自身も背囊を背にして、いつも部隊の先頭を歩いていた。

『4月29日』…夕方になるとモールメンからトラックをもって、磯田中将が帰ってきた。ネタージにジャンシー連隊のみはこのトラックに乗り、残余の国民軍将兵は行軍（徒歩）で来るように頼んだ。日本軍が渡す船を全部にぎっているから、もしネタージが車で行ってしまったが最後、国民軍は次の渡し場で、釘付けになることは火を見るより明らかである。ネタージは凜として磯田中将に言った。

『私は部下を捨てて逃げ出したビルマのバーモー（当時のビルマ首相）ではありません。私は幾度も申し上げたように、私の部下の、最後が安全になるまで、先には行きません。』

これを聞いて、この日本の将官はだまって歩き出した。…

『5月1日』我々はモールメンに到着した。過去六ヶ月間、我々は移動しつづけた。ネタージは一日二時間以上の睡眠をとっていなかった。我々は昼寝て夜歩いた。しかし、ネタージは昼も夜も忙しくて寝ていなかった。』

● 日本の敗戦とスバス・チャンドラ・ボースの死亡

日本の敗戦により、日本と協力してインド独立を勝ち取ることが不可能となった。ボースは東西冷戦を予想し、イギリスに対抗するためソ連と協力しようとした。しかしソ連へ向かおうとした時、台湾の松山飛行場で搭乗していた九七式重爆撃機の墜落事故により死去した。

彼の臨終の言葉は『インドは自由になるだろう。そして永遠に自由だ。』

ボースの遺骨は東京都杉並区の日蓮宗蓮光寺で眠っている。

インドでは、チャンドラ・ボースは生きているという噂が長く語られ、政府が調査団を組織して生存の可能性がないことを確認し、報告書も作成した。しかし、近年実施された3度目の報告書では、台湾での死亡と日本での埋葬に関して「確実とはいえない」という内容となっており、再び議論を呼び起こしている。この件に関してボースの遺族は、報告書の内容に批判的な立場を取っていると伝えられている。その後蓮光寺には、インドのプラサード大統領・ネルー首相・ガンジー首相などが訪問しており、その時の言葉も碑文として残されている。



日蓮宗蓮光寺にあるボースの胸像

● その後のインド独立

デリー市内のレッド・フォート（旧ムガル王朝の城）にINA軍人と旧日本軍人が収容されていた。裁判で首席弁護士を務めるデサイ博士は、そっと日本軍人に囁いた。

「インドの独立は程なくまっとうする。そのチャンスを与えてくれたのは日本である。独立は30年早まった。これはビルマなど東南アジア諸国共通である。インド国民は、これを深く肝銘している。国民は日本の復興に、あらゆる協力を惜しまないだろう」と。

デサイ博士の言う通りだった。英国によるINA軍事法廷は、インド国民の独立へのうねり呼んだ。1945年（昭和20年）11月に第1回の法廷が開かれた時、主要都市では民衆が蜂起し、カルカッタ（現コルカタ）でのデモは10万人に膨れ上がった。2回目の法廷が開かれた際には、各地でゼネストが起こり『INAの英雄を救え』の大合唱が続いた。そして、遂には英軍の艦船20隻が叛乱軍に奪われる事態にも発展する。英国植民地政府は、第3回法廷でINA全将校の釈放を決定。その約1年後にインドは悲願の独立を達成するのである。

旧INA軍人が、その後のインド政府及び軍の要職についている。

広島原爆記念日である毎年8月6日に国会が会期中の際は黙祷を捧げているほか、昭和天皇崩御の際には3日間喪に服した。極めて親日的な国家である。

IV 結び

歴史を回顧すれば、国家民族にとって『独立』は何物にも替え難く貴重である。しかし、この独立には民族の血が多く、且つ悲惨に流れている。従って、この闘争過程で結びついた友情と信頼ほど強固な絆はない。

読者の皆様方は、この粗文を読まれて、我が国とインドとの独立を巡った固い絆とインド独立の父スバス・チャンドラ・ボースの偉業を知って頂いたと思う。

私は、凡そ80年の苦闘の歴史を持つインド国民会議派、スバス・チャンドラ・ボーズという英雄、ガンジーという聖雄、ネールという指導者、そして、これらの人々に率いられたインド青年が、尊い犠牲によって輝かしい独立を勝ち取られたことに対して、心から敬意を表したい。

特に、この光栄ある独立を一日も早く到来せしめるために、日本と手を組み、印緬（インドとミャンマー）のジャングルで死闘し、日本の敗戦に殉ずるように台北の上空で散華したスバス・チャンドラ・ボースと、彼が率いたインド国民軍、これを助けた我が日本軍が、どのように活躍したか、これがインド独立をどれほど早かにしたか、また、その過程での固い絆が戦後の両国の信頼と友情につながったかを、



我が郷土の旧日本陸軍・姫路第 111 連隊は、
インド国民軍（Indian National Army、略号：INA）との合同作戦で、
現ミャンマーのシットウエー（旧アキャブ）付近に於いて英軍と激戦を交えた。
1944 年 2 月、作戦中の休憩時間にインド国民軍兵士のタバコに火をつける歩兵第 111 連隊将校

現在の日本人が知らなくなってしまうのではないかと危惧している。
第二次大戦は確かに、我国はアジア諸国を中心にして、その惨禍を被らせたことにお詫びと反省をしなければならない。二度と我々日本人は過ちを犯してはならないことを肝に銘じ、今後の我国の若人に申し伝えねばならない。
しかし、自虐的な書物及び報道によって、第二次大戦に対して日本が果たした世界史的な役割も、また見失ってはならない。
私は、平和共存を前提にして、いま、この旗を建てるため、我々日本人がいかなる働きをしたかを聞かされるならば、我が民族は必ずや、再び、失われた自信を取戻し、胸を張って、新しい人類の理想のために前進するのではないかと思う。

今後、必ずやアジアの共同体が作られるであろうと思うとき、過ぎし時代に、戦争という過酷な事件のなかで、我国の若人が、インドと、ベトナム、ミャンマーと、インドネシアなどの若人と力を合わせ、若い情熱を燃やし、独立の理想に向って、突き進んで行った光景が臉に、それとダブッテ浮かんでくる。

また、この我国とインドとの固い友情と信頼は、今後、我国が如何なる展開を為そうとも、我々日本人が忘れてはならない両国の重要な絆であると確信している次第である。
今回の粗文作成には、以下の参考文献から引用すると共に、知人からの情報を利用して頂いた。

何時もの通り、文中、誤字脱字、意味不明な文章には平に御容赦を願う。

2009年10月25日
高松重信
台湾新竹市

参考文献

- 国塚一乗著『印度洋にかかる虹』1-239頁、光文社、1958年12月
- 国塚一乗著『インパールを超えて』1-253頁、講談社、1995年6月
- 村田平次著『インパール作戦』1-298頁、原書房、1967年4月

筆者略歴

たかまつしげのぶ

高松重信



1942年生まれ。1967年国鉄入社、本社及び松任工場長、吹田工場長などを経て、民間会社の海外鉄道車両関係に従事。台湾に約5年6か月・電車の現地生産・責任者として駐在。

ミャンマーとの関係は1982年国鉄からビルマ国鉄へ派遣、いらい現在に至るまでミャンマー鉄道省運輸省及び同国鉄へ顧問的な指導。鉄道に関する論文発表多数。

元国土交通省ミャンマー鉄道改善WGのメンバー。2022年8月外務大臣表彰受賞。現(一社)日本ミャンマー友好協会(副会長)。現JICAミャンマー鉄道政策&技術顧問。

日緬ライブラリー・パダウ 5

嘗てのビルマ戦線で戦った日本将兵を想う

<その4>

一日・印の絆（スバス・チャンドラ・ボースと旧日本陸軍の藤原機関）――

高松重信 著

2025年2月1日 発行

発行者：一般社団法人日本ミャンマー友好協会

〒160-0012

東京都新宿区南元町13-3-504 ライオンズマンション信濃町5F

TEL 03-6380-0409

ISBN 978-4-911475-04-1 C1810

©高松重信 2025